



列氏財政論後編

第一冊

2959



114
A1451
1



政論後編

第二篇

公信用

第一章

公信用ハ普通ノ現象○公信用ト

クレジットバンク私信用トノ差別

凡ソ信用ハ或ハ一定ノ限期ニ照シ若クハ雙方ノ便宜ニ應シテ日後ニ償還スルノ約諾ヲ以テシ或ハ限期ヲ定メ若クハ限期ヲ定メスシテ利息ヲ交付スルノ契約ヲ以テシ或ハ上文ノ二項ヲ併約シテ以テ他人ノ資財ヲ自在ニ享受使用

大正十一年四月贈

スルヲ得ルノ能力ニ存ス斯ノ如ク一時若クハ永年ニ他人ノ資財ヲ使用スルハ即チ是レ開明ノ邦國ニ於テ普通ニ行ハル、所ノ事例ナリ夫レ人ノ日用物品ヲ購買スルヤ將來ノ收額ヲ支用シ登時ニ價直ヲ支辨セスシテ知ラス識ラス信用ノ地域ニ居ラサル者ハ幾ント希レナリ一國ノ政府ニ於テモ亦猶ホ各人ノゴトク時ノ古今ト地ノ東西トヲ論セス或ハ永期ノ公債ヲ募起シ或ハ紙幣ノ通用ヲ要強シ或ハ動産ヲ典當シ若クハ不動産ヲ抵當シ若クハ租稅ヲ抵賣

シ若クハ將來ノ收入ヲ豫供シ若クハ償還ノ限期ヲ延捱シテ以テ財本ヲ假借スルノ信用カニ依ラサル者ハ未タ之有ラス凡ソ政府ニシテ不動債ヲ負ハサル者ハ間マ多キモ而モ動債ヲ負ハサル者ハ蓋シ少クナシ彼ノ短期ノ動債ハ即チ窮モ舊套ノ公債方法ニシテ輓近ニ至リテモ亦政制人智ノ尚ホ未タ開明ニ進マサル邦國ニ於テハ帝ニ見ニ牢存セルノミナラス年々愈多キヲ加フルニ至レリ即チ英國ハ此動債ヲ負フヤ洵トニ少ナク佛國ニ於テハ之ヲ負フヤ稍多

ク而シテ埃及及土耳其、如キハ更ニ尤モ其
多キヲ見ル故ニ短期ノ動債ヲ廢シテ不動債
若クハ長期ノ動債ヲ以テ之ニ換フルハ財政ノ
經理其宜キヲ得ルノ一斑ヲ見ル可キナリ
政府ト各人トヲ問ハス常ニ專ラ信用ヲ要スル
所以ハ他ナレ是レ費額ノ支撥ト入額ノ領收ト
ハ常ニ一時ニ併到スルニ非ス且ツ一歳ノ間同
一季節ニ於テ其收入額ト其支出額ト、必ス相
均準スルニ非サルカ為メナリ夫レ財計方法ノ
窳モ善ク其宜キヲ得タル邦國ニ於テハ會計年

度ノ終末ニ至レハ則チ其收入ト其支出トカ能
ク相均準スルヲ得ルヤ必ス可ク且ツ富饒ナ
ル邦國ニシテ賦課苛重ナラサレハ則チ租稅ヲ
定期ニ納完セシムルヲ得ルヤ必ス可シ然リ
ト雖モ各般ノ景況ヲ現出スルカ為メニ時ニ或
ハ租稅ノ納期ヲ延推スルヲ無キニ非ラス凡ソ
財政ノ善ク整頓セル邦國ニ在リテハ屢巨額ノ
動債ヲ募起シテ以テ其租稅ヲ豫供スルヲ要ス
ルカ如キ景況ニ遇著スルヲ無カル可シトハ嘗
テ我佛國ノ會計宰相「レオンセー」氏ノ斷言セシ

所ナリ夫レ然リ然リト雖氏全ク此一時ノ公債
ヲ廢セントスルハ得テ望ム可カラサル事ニ屬
ス今若シ全ク之ヲ廢センコトヲ欲セハ則チ鉅多
ノ財帑ヲ國庫ニ貯蓄シ若クハ歲出實額ヨリモ
大ニ超過セル歲入額ノ豫算法ヲ立定セサル可
カラサルナリ又政府カ容易ニ公債ヲ廢スルコ
ト得サル第二ノ理由アリ即チ臨時若クハ要急
ノ費用ニシテ通常歲費額内ヨリ支フルコト能ハ
サル者ヲ避ク可カラサル場合ニ遭フ如キ是ナ
リ夫レ何等ノ政府ニ於テモ或ハ公益ニ關スル

鉅大ノ事業ヲ創興スル有リテ若シ通常ノ歲費
定額ヲ以テ其工費ヲ支辨スレハ則チ竣成ノ時
日ヲ期ス可カラサル如キコト無キニ非ス又何等
ノ邦國ニ於テモ或種ノ事變偶然ニ起發スルノ
日或ハ兼釣者ノ誤着ニ由リテ一朝外國ト曲直
ヲ干戈ニ争フコト有ルノ日ニ當リ若シ歲入額ノ
外ハ他ニ財源ヲ得可キ方策ヲ有セサレハ則チ
為メニ失敗ヲ取ルコトヲ免カレサルノ時機ナキ
コトヲ保セス
夫レ然リ是ヲ以テ如何ナル邦國タルヲ論セス

常ニ巨額ノ財帑ヲ國庫ニ貯蓄シテ自在ニ之ヲ
使用スルヲ得ルニ非サレハ則チ各般ノ時機
ニ當リテ公信用ニ依ラサルヲ得サルナリ
又國運ノ愈々開進スルニ隨テ愈々公債ノ增多スル
有ルヲニ注意ス可シ凡ソ公債ヲ募起スルヤ其
方法ハ各様各種ノ異ナル有ルモ其目的ニ至リ
テハ唯二事ニ限ルノミ即チ其一ハ急成ヲ要ス
ル土工ニシテ其一ハ兩國ノ釁端ヲ啓ケル葛藤
是ナリ夫レ公同工作ノ今日ニ頻繁ナル昔日ノ
比ニ非サルハ言ヲ俟タス而シテ往々大業ニ涉

レリ加之ノミナラス供充資本ノ耗散ヲ避ル為
メニ務メテ迅速ニ其工事ヲ竣成スルヲ尚フ
ニ至レリ又今時ヲ以テ往時ニ較フレハ兩國相
ニ寇鬪スル稍少ナシト雖モ其費用ノ如キハ
却テ多キヲ加フル有リ殊ニ其戰勢甚々急ニシ
テ兵カヲ一時ニ竭盡スルヲ要シ復々歲月ヲ
空費スルヲ容サス往時ニ在リテハ社會政体
ノ組織今日ニ殊ニシテ且ツ學問技術ノ粗拙ナ
ルカ為メニ戰費甚々僅少ニシテ關カ極メテ緩
漫ナリシニ由リ常ニ歲月ノ長キニ亘レ以是ヲ

以テ平時ノ租税ニ比シテ微ク賦課ヲ重ハスレ
ハ則チ以テ能ク戦費ヲ支持スルヲ得タリ嘗
テ某時代ニ於テハ専ラ貴族ノ其身命ヲ君主ニ
致シ毫モ報酬ヲ受ルヲ無クシテ兵役ニ服事シ
或ハ各邑ニ於テ民兵ヲ團結シ以テ戦役ニ従事
セシメタルニ由リ貴族ハ是カ為メ其財産ヲ典
當ニ供シテ借金ヲ募リ以テ自己ト其隷従トノ
軍装ヲ備辨シ各邑モ亦均ク邑債ヲ起シテ以テ
其民兵ノ軍装ヲ備辨シタリ故ニ當時ノ君主即
チ國家ハ唯獨リ戦時ノ費用ヲ負擔スルヲ要

セサリシ路易第十四世ノ治時ニ至リテ貴族カ
頻數ノ戦争ニ巨多ノ貨財ヲ費用シタルハ吾人
ノ普ク知ル所ナリ又常備兵ヲ設置シテ日給ヲ
付與スルニ至リテモ戦費ノ少額ナル實ニ今日
ノ多額ヲ要スルニ比ス可カラス是レ當ニ當時
ノ常備隊兵ノ少数ナリシカ為メノミナラス其戦
争ノ常ニ許多ノ歲月ヲ經過セシニ由リテナリ
嘗テ三十年ノ戦役有リ又七年ノ戦役有リ近代
ノ戦役ハ大抵七年ニ涉ラサル者無シ此ノ如ク
戦役ノ連年ニ亘リシ所以ハ蓋シ其戦闘令撃ノ

甚々緩漫ニシテ冬時ニ至レハ常ニ寨柵ヲ嬰守
シ一年ノ強半ハ曠日相對セシニ是レ由レリ故
ニ當時ノ戦役ハ常ニ僅少ノ費用ヲ要スルニ過
キサリシモ今日ニ在リテハ之ニ反シテ數日間
若クハ數週間長キモ數月間ニ於テ國民ノ全力
ヲ竭シ且ツ非常ノ多費ヲ供スルヲ要スルニ
至レリ思フニ將來ニ在リテハ兩國ノ或ハ釁ヲ
啓キ戦ヲ交ユルヲ有ルヤ其費用ハ彼此各十五
億萬「フラン」ニ下ラサル可シ臨時要急ノ費用此
ノ如ク其レ巨多ナルヲ免カレサルニ繇リテ

之ヲ觀レバ則チ租稅ヲ追歛スルモ遲緩ニシテ
且ツ完納ヲ保シ難キ者ヲ以テ此費用ニ充支ス
ルヲ得可カラサルハ豈ニ必然ノ情勢ニ非ラ
スヤ
方今各國政府ノ概チ公信用ニ依リテ公債ヲ募
起スルノ緊要ヲ有スルヲ恰モ各人ノ私信用ニ
依リテ私債ヲ募起スルト一般ナルモ是カ為メ
ニ公信用ヲ私信用ト全ク其性質ヲ同クスルニ
非ス夫レ公信用ト私信用トヲ問ハズ共ニ其目
的ハ他人ノ資財ヲ得テ一時若クハ永年迄尙テ

自在ニ之ヲ使用スルノ点ニ在リト雖其相似
ル所ノ者ハ唯々此一点ニ止マルノミニシテ其
相異ナル所ノ者ハ数多ノ点ニ係リ且ツ頗ル重
要ノ者ニ屬ス

凡ソ容易ニ信用ヲ得ル所ノ各人ハ多クハ動産
若クハ不動産ヲ所有スルカ故ニ之ヲ抵當ニ供
シテ以テ必要ノ金額ヲ借用スルヲ得可シ今
夫レ一人有リテ偶然ノ事變ニ遭罹シ是カ爲メ
ニ通常ノ收入額ヲ以テ支辨ス可カラサル巨額
ノ費用ヲ要スルハニ當リテハ果シテ如何ナル

處置ヲ取ル可キカ若シ見ニ公債証書若クハ其
他人ノ保債証券ヲ動産ヲ所有スレハ則チ其幾部
分ヲ賣放シ或ハ之ヲ銀行ニ交付シ以テ必要
ノ金額ヲ借用スルヲ得可ク若シ此類ノ動産
ヲ所有セスレテ唯土地ノミヲ所有スルモ亦之
ヲ抵當ニ供充シ若クハ其幾部分ヲ賣放シテ以
テ均シク必要ノ金額ヲ得可シ是故ニ資力ヲ有
スル人ハ偶然ニ巨額ノ費金ヲ要スル場合ニ當
リ或ハ其見有金ヲ費用シ或ハ其所有財産ノ幾
部分ヲ賣放スルニ由リ起債ノ危険ヲ殆ク始キ

ハ殆ト少レナリ蓋シ穩當ノ處置ト謂フ可シ且
ツ縱令、負債ヲ起サント欲スルモ通常確實ノ典
質ヲ供出シテ以テ其債金ヲ保証スルヲ得可
シ是ニ繚リテ之ヲ觀レハ各人ノ私信用ハ明白
ナル界限ノ存スル有リテ常ニ必ス其所有財産
若クハ起債ノ方法ニ比例シテ以テ増減消長ス
ル者タルヲ知ル可シ

政府ノ如キハ其地位全ク各人ノ地位ト異ニシ
テ彼ノ資力ヲ有シ且ツ戒慎ヲ加フル者ニ以ス
レハ家モ數、公債ヲ募起スルノ景況ニ遭フヲ

免レス且ツ夫レ政府ノ信用ハ強固ノ性質ヲ有
セス何トナレハ則チ國家ノ財産タル多クハ貸
幣ニ交換スルヲ得ス且ツ比例ヲ以テ之ヲ言
ハハ其量甚々僅少ナルヲ以テナリ近代ニ於テ
各國ノ政府ハ大抵諸種ノ建造物及ヒ許多ノ森
林ヲ所有スト雖氏是等ノ財産タル本ト人ノ所
好ニ適セス亦得テ賣放ス可キ者ニ非ス若シ夫
レ政府ノ所有セル各地ノ鑛山及ヒ諸所ノ錢道
ハ或ハ之ヲ賣放シ或ハ之ヲ典質シ或ハ若干ノ
年期ヲ限リテ以テ其收益ヲ人ニ讓與スルヲ

得可シト雖氏斯ノ如キ場合ニ至ルヲハ甚々稀
少ナリ且ツ假令ヒ此場合ニ至ルヲ有ルモ政府
ノ財政困難ノ日ニ際シ此等ノ財産ヲ賣放シ或
ハ讓與シテ以テ資本ヲ得ルハ其公信用ニ依據
シテ以テ公債ヲ募起スルニ比スレハ巨大ノ損
失ヲ受クルヤ實驗上ニ於テ確徵スル所タリ是
レ即チ此等ノ方法ハ政府ノ理財ニ拙劣ニシテ
且ツ人民ノ政府ニ信用ヲ置カサル如キ邦國ニ
於テ慣用スル所以ナリ又政府ハ本來其固有ニ
屬スルニ非サルモ或種ノ工業ニ関スルボル權權ヲ

發賣シテ以テ巨額ノ價金ヲ即納セシムルヲ有
リ是レ亦一種ノ間接ナル公債ニシテ而モ人民
ノ利便ヲ妨害スル者ト謂フ可シ
又政府ハ時ニ或ハ内國及ヒ外國ノ公債証書若クハ動産モビリエ信券或ハ無形動産ト認ス
債証書ハ則チ年賦償消金ヲ以テ公債証書ヲ買
回シ而シテ尚ホ毀銷セサル如キ者ニシテ又其
内國動産信券ハ政府ノ協力ヲ以テ創立セル無
名會社ノ信券ノ如キ是レナリ其外國公債証書
ハ則チ外國政府ノ公債証書ヲ收買セシ者ニシ

テ例ハ千八百四十八年以前ニ於テ露國政府
カ佛國ノ公債証書ヲ收買シ又千八百七十年ノ
佛普戰爭以後ニ於テ普漏士政府カ米利堅ノ公
債証書及テ其他ノ公債証書ヲ收買シタル如キ
是ナリ若シ政府カ此類ノ財産ヲ所有スレハ則
チ其偶困厄ニ陥ルヲ有ルノ日ニ當リテ之ヲ現
金ニ交換スルヲ得可シト雖氏然レ氏巨額ノ
公債証書若クハ其他ノ動産信券ヲ貯蓄シテ以
テ能ク要急ノ大費ニ應レ國難ノ景況ニ當リテ
モ公債募起ノ方策ニ頼ルヲ免レシムル如キ

ハ蓋シ絶無ノ事ニ属ス
又政府ハ平時若クハ戰時ノ為メニ歳入額ノ剩
餘ヲ積集シテ以テ貨幣ヲ貯蓄スルヲ得可シ
往時ニ在リテハ各國ノ政府概チ常ニ貨幣ノ貯
蓄ヲ為セシト雖氏今日ニ於テハ之ヲ為スヤ甚
タ稀ナリ抑モ此ノ貯蓄タル政府ヲシテ全ク公
債ヲ募起スルヲ要セサレシムルニ非サレハ
則チ必ス其募起ス可キ公債ノ金額ヲ減少シ若
クハ其公債募起ノ期ヲ緩クスルヲ得セシム
ル者タリ見今各國ノ政府カ貨幣ヲ貯蓄シ若ク

ハ動産信券ヲ貯蓄スル利便、如何ハ余將ニ
後章ニ於テ之ヲ論述セントス
其利便ノ如何ニ拘ハラズ此類ノ貯蓄ハ各國ノ
政府ニ於テ稀ニ之有ル所ノ者ニシテ見今開明
ノ邦國中ニ於テハ獨リ普國政府、之此貯蓄法
ヲ施行セル實例ヲ微見ス然リ而シテ此貯蓄庫
ヲ特設セス若クハ其貯蓄ノ尚ホ未タ充分セサ
ルハ即チ是レ公債募起ノ已ムヲ得ナルニ出ツ
ルノ一原因ナリ
余カ上文ニ説述セル所ニ就キテ仔細ニ之ヲ考

究セハ則チ自カラ能ク政府ノ信用ト各人ノ信
用トハ其重要ノ点ニ於テ分明ニ一大差別ノ存
スル有ルヲ領會ス可シ蓋シ資カヲ有スル人
ハ通常其所有スル財産ノ一部分ヲ賣放シテ以
テ私債ヲ起スヲ免ル可ク或ハ之ヲ把テ典質
ニ供充スルヲ得可シト雖モ政府ノ如キハ通
常財産ヲ所有スルヲ無シ縱令之ヲ所有スル
モ亦甚々微小ナリ此狀況ヲ在ル有ルカ為メニ
政府ノ信用ハ之ヲ各人ノ信用ニ比スレハ寧モ
強固ナラスレテ且ツ容易ニ跌蹉ヲ致スヲ有ル

ヲ免レス

然レハ則チ政府カ其募起スル公債ヲ保証スル
為メニ施行ス可キ方略ハ果シテ何者ヲ以テ確
實ナリト為ス可キカ其第一ヲ現課ノ通常租稅
トス然レモ此現課ノ通常租稅ヲ以テ此保証ニ
供充スルハ其措置頗ル失當ナリト謂フ可シ何
トナレバ則チ是レ既ニ通常歳出費額ノ支辨ニ
供スル所ノ者タルヲ以テナリ夫レ借主タル政
府カ数年前ヨリシテ其歳入ノ多量ナル剩餘
ヲ貯蓄スルニ非ス又是ニ於テ痛ク其歳出額ヲ

減少スルニ非サレハ則チ現課ノ通常租稅ノ一
部分タモ以テ起債ノ保証ニ供充シテ之ヲ支用
スルコトヲ得サル可キハ蓋シ論ヲ俟タサルナリ
余ハ今又政府ノ財計ト各人ノ財計ト其間ニ存
スル差別ヲ把リテ更ニ之ヲ指示スルノ機會ヲ
得ルニ至レリ夫レ富者ノ歳出豫算ハ一時大ニ
之ヲ減スルコトヲ得可シ縱令ニ其儉居スル家屋
ノ賃錢ハ直チニ之ヲ減スルコトヲ得可カラサル
モ其衣食及ヒ娛樂ニ供給スル費用ノ如キハ直
チニ之ヲ減スルコト固ヨリ難事ニ非スシテ唯其

大
女
宮

果斷ト其戒心トヲ用フルニ在ルノミ然レモ政
府ハ全ク之ト異ニシテ遽然大ニ其通常歳費額
ヲ減少スルハ至難ノ事ニ属シ而シテ時ニ或ハ
断シテ之ヲ決行スルトヲ得可カラサルノ場合
有リ其故何ソヤ抑モ政府ノ費用ハ之ヲ三種ニ
類別ス可シ即チ其第一ハ公債ノ利息其第二ハ
公同工作ノ経費其第三ハ凡百ノ官吏ニ支給ス
ル俸祿是ナリ試ミニ歳出豫算表ノ節目ヲ検討
セヨ乃チ能ク政府ノ費用ハ此三種類ニ帰着ス
ルトヲ領會ス可シ夫レ公債ノ利息ニ供充スル

第一種ノ費用ハ必然ニ支辨スルト能ハサルノ
場合ニ於ケルニ非サレハ則チ政府ノ決断ヲ以
テ擅ニ之ヲ減スルトヲ得可カラス又公同工作
ニ供充スル第二種ノ費用ハ毫モ之ヲ減スルト
能ハサル者ニハ非サルモ亦大ニ減省ヲ加フル
如キハ蓋シ難シトス何トナレハ則チ凡ソ該費
用ニ供充スル金額ハ既成ノ公同工作ヲ保持シ
或ハ新創ノ公同工作ヲ竣成セシムル為メニ供
充スル所ノ者ニ係リ若シ勵精注意シテ以テ修
繕セス若クハ之ヲ竣成セサレハ既成ノ工作ハ

破壊ニ帰シ其未成ノ工作ハ無用ニ帰シ且ツ陵
蔑ニ委シテ寢ム可キヲ以テナリ但々新創ノ
工作ニ至リテハ實ニ且ラク之ヲ措摺スルヲ
得サルニハ非サレ氏亦其邦ヲシテ他ノ邦國ト
富利ヲ競争スルヲ得サル如キ地位ニ立タシ
ムルニ非サルヨリハ決シテ之ヲ措摺スルヲ能
ハサル場合モ往々ニシテ之レ有ルナリ若シ夫
レ第三種ノ費用即チ凡百ノ官吏ニ支給スル俸
祿ハ何レノ邦國ニ於テモ一時ニ之ヲ痛減スル
ハ大抵困難ノ事情有ルヲ察セヨ凡ソ政府ノ歳

出豫算額ノ大半ハ之ヲ官吏ノ俸祿ニ支充スル
者タリ彼ノ各人ノ雇使スル僕婢ハ通常奢侈若
クハ逸樂ノ為メニ要用スル所ノ者其多キニ居
リ且ツ縱令ニ解遣セラレ、ト有ルモ其僕婢ハ
直チニ轉シテ他ノ雇主ニ雇役セラレ、トヲ得
ルニ由リ僅ニ数月ノ限期ヲ定メテ以テ其半数
若クハ三分ノ二ヲ解遣スルヲ得可シト雖氏
政府ニシテ其官吏ノ半数若クハ三分ノ二ヲ解
遣セント欲スルハ蓋シ得可カラサルノ事タリ
何トナレハ則チ帝ニ社會ノ公務其秩序是カ為

メニ紊乱スルノミナラス解遣セル官吏ノ新ニ
私業ニ就クニ至ルマテハ全ク生計ノ目途ヲ立
ルヲ得サルヲ以テナリ蓋シ政治生業及ヒ道德
ノ三者ニ関スル理由ノ存スル有リテ肯テ嚴酷
ノ措置ヲ決行セシメサルカ故ニ若シ己ムヲ得
サル場合ニ會スレハ必ス善ク其適度ヲ計量シ
漸ヲ以テ之カ處置ヲ為サ、ル可カラズ兵備ノ
一事ニ至リテハ痛ク其費用ヲ減スルヲ得ル
ルニ非スト雖モ大体ノ政略ヨリ觀察ヲ下タシ
テ一朝大變動ノ起癸スルヲ豫虞スレハ則チ

太平無事ノ日ニ於テモ亦遽ニ軍兵ノ負數ヲ省
ク可カラサル者アリ獨リ米利堅ノ一國ノミ嘗
テ一大戦役ヲ經過セシ以後ニ於テ断然ニ軍隊
ヲ解散スルヲ得タリ然レモ彼ノ米利堅ハ絶
ヘテ強大相敵ス可キ隣國ノ在ルヲ無クシテ其
立國ノ地位全ク他國ト異ナル者アルニ注意セ
サル可カラズ試ミニ實際ニ証徴セヨ開明ノ大
國ニ於テ未ダ嘗テ歳出豫算額ニ痛ク節約ヲ加
ヘタルノ事例有ラサルヲ其常ニ節約ヲ加フ
ルヲ欲セサルニハ非サルモ而モ歳出豫算ニ

於テ此ノ一章ニ節約ヲ加フレハ他ノ一章ニ増
多ヲ要スルヲ有リテ到底減少ノ目的ヲ達スル
ヲ能ハサルナリ是故ニ遽ニ一國ノ歳出額ヲ減
少セント欲スルハ其困難ナル之ヲ各人ノ財計
ニ比スレハ最モ甚シトス是レ各國政府ノ公債
募起ヲ頻數ニ涉ラシメ且ツ政府ノ信用ノ各人
ノ信用ニ較フレハ最モ強固ナラスシテ而シテ
又現課ノ通常租稅ヲ把リ鉅額公債ノ保証ニ供
充スルニ足ラサル所以ナリ故ヲ以テ若シ政府
カ新ニ公債ヲ募起スルヤ之ヲ募起スルト同時

ニ新ニ租稅ヲ賦課シ而シテ此新課ノ租稅ハ之
ヲ他ノ費途ニ支弁スルヲ無ク必ス其公債ノ貸
主ニ向テ保証ニ供充セサルヲ得サル可シ
凡ソ政府ハ僅少ノ財産ヲ所有シ而シテ唯定額
ノ歳入租稅ヲ支用スルヲ得ルニ過キサレハ
又一種ノ情况有リテ余カ茲ニ特ニ說示ヲ要ス
ル者ナリ是レ何ソヤ政府ノ歳入額ハ甚々羸縮
ヲ生シテ復々明確ニ其收量ヲ限定ス可カラズ
ル事實ナリ夫レ政府ハ各人民ノ歳入ニ賦課シ
テ以テ其歳入ヲ徵收ス然ルニ法律若クハ風習

若クハ慣例ニ於テモ共ニ政府カ徴收スルヲ
得可キ各人民歳入ノ部分ヲ豫定セシテ有ラス
然レハ則チ縱令ニ概算ヲ以テスルモ安ソ政府
カ政治、社會及ニ經濟ヲ紊乱スルヲ無クシテ能
ク賦課徴收スルヲ得可キ國民ノ歳入部分ヲ
測知ス可ケンヤ故ニ實際政府カ租税ヲ賦課徴
收スルノ限度ニ關シテハ唯國民ノ敢拒スルト
國會代議士ノ敢拒スルトノ二者有ルヲ見ルノ
ミ然レモ是レ亦唯々推想上ノ限度タルニ過キ
サルナリ夫レ政府ノ信用ハ譬ハ彼ノ富人若

クハ定額年俸ヲ領受スル人ノ子ノ信用ノ如シ
蓋シ債主カ納税者及ニ國會代議士ノ忍容資給
ノ淺深厚薄ノ程度如何ヲ測知スルヲ得サル
ハ恰モ外人カ其父ノ忍容資給ノ淺深厚薄ノ程
度如何ヲ測知スルヲ得サルト一般ナリ故ニ
一人々モ精密ニ政府ノ財源ヲ計知スルヲ得
スシテ唯塵カニ茫洋ノ推測ヲ下タスニ止マル
ノミ
又政府ノ信用ト各人ノ信用トヲ區別スヘキ一
種ノ差異有ルヲ見ル凡ソ借主タル各人ハ常ニ

約定ノ利息ヲ支辨セス或ハ豫定ノ期限ニ照ラ
シテ母金ヲ償還セサレハ貸主ノ督催ヲ受ク可
クシテ決シテ言フ食ミ約ニ違フヲ得ス若シ
此レ有ルヤ便チ法律及ヒ法衙ノ存スル有リテ
以テ其契約ヲ必行セシム然レモ借主タル政府
ノ地位ハ全ク之ニ異リ夫レ政府ハ唯道德上ノ
檢束ヲ受クルノミニシテ其締結セル契約ヲ踐
行セシム可キ確實ナル手段ノ存スルヲ無シ且
夫レ政府ハ自カラ其公債償還ニ供充ス可キ資
産ノ有無ヲ評量スルノ裁判官タルニ由リ復々

一人々モ之ヲ法庭ニ勾召スルノ権理ヲ有スル
者無シ故ニ政府ハ自カラ其歳入額ト歳出額ト
ヲ度量シ而ル後ニ納稅者ニ對シテ苛重ノ租稅
ヲ賦課シ以テ其辨償ノ責務ヲ解卸スルト若ク
ハ竭産抵償ノ方略ヲ取り債主ニ協約ヲ要強シ
テ之ヲシテ必ス兼諾セシムルトハ其自由ニ屬
ス政府ノ其債主ニ向テ協約ヲ要強シタル例証
ハ近世ノ財政歴史上ニ於テ往々ニ見ル所ナリ
然リ而シテ縱令ヒ此ノ如キ場合ニ遭フヲ有ル
モ政府ノ失信違約ヲ詰責ス可キノ方法ハ絶ヘ

テ之有ルヲ無シ抑モ此見象ヲ来タスハ理勢ノ
己ムヲ得サルニ出ル者タリ夫レ政府ノ歳入タ
ル本ト明確ノ界限無クシテ一般納税者ノ歳入
ニ賦課シテ之ヲ徴收シ而シテ其賦課ノ程度ハ
元來法律若クハ慣例ノ指定セサルニ由リテ之
ヲ觀レハ租税ヲ増課シ若クハ經費ヲ減約スル
モ為メニ或ハ公務ノ紊乱ヲ醸成シ或ハ國民ノ
命脉ヲ危険ニ置ク丁無キヤ否ヤヲ判定スルハ
蓋シ政府ニ如ク者莫シト爲セシ者タルヲ領
會スルニ足ラン凡ソ政府ノ負債ハ實ニ正義ニ

由ルノ負債タソト雖モ微ヤ危険ノ性質ヲ帶ル
者ニシテ其償還ヲ要強スルニ依法ノ手段無キ
ヲ奈何センヤ
今茲ニ政府ノ信用ト各人ノ信用トヲ同一視ス
可カラサル竅後ノ差別ヲ標示セン夫レ何レノ
邦國タルヲ論セスシテ新政府ハ必ス舊政府ノ
締結セシ契約ヲ兼継スルノ慣習タルニ由リ貸
主カ借主タル政府ヲ視ルヲ猶ホ不死不滅ノ人
ヲ視ルカエトシ故ニ借主タル政府ノ永存スル
ハ即チ亦其公債ヲ募起スル原因ノ其一ヲ爲ス

者タリ抑モ政府ノ信用ト各人ノ信用ト其間ニ
存スル差別ヲ指示スルノ最モ重要ニ屬スル所
以ハ他無シ蓋シ借主ノ分限及ヒ其性質ノ別異
ヲ詳ニセサレハ其公債ヲ募起スル方法モ亦決
シテ鮮知ス可カラサルヲ以テナリ加之ノミナ
ラス若シ其分限性質ノ異同ヲ詳ニセサレハ則
チ各種各様ノ公債方法ヲ視テ偶然ノ成果ニ出
テ若クハ小智ノ叛造ニ出ル者ト為シ随テ政府
ノ信用ト各人ノ信用ト其二種ナルハ果シテ何
故ナルカ又政府ニ在リテハ有用ノ起債ニシテ

且ツ之ニ許ス可キ方法ナルモ各人ニ在リテハ
有害ノ起債ニシテ且ツ之ニ禁ス可キ方法ト為
ルハ果シテ何故ナルカヲ領會スルヲ能ハサル
ニ由レハナリ
今政府ノ募債ニ關スル約款ト各人ノ募債ニ關
スル約款トハ全ク反對ノ点ニ在ルヲ論述セ
ン今夫レ佛國政府若クハ英國政府ノ公債募起
法ニ倣フテ私債ヲ募起スル者アラシニ歐羅巴
洲内ニ於テ如何ナル裁判所ナルモ豈ニ之ニ其
意見ヲ與ヘント欲スル者アラシヤ然レハ則チ

彼ノ開明ヲ以テ誇稱スル佛英ノ政府ニシテ其
能力ノ却テ各人ニ及ハサル所存リト云フ可キ
カ若シ果シテ然リトセハ是レ粗鹵ノ見解タル
ヲ免レス令若シ一國ノ政府ニシテ俄ニ巨多ノ
金額ヲ要シ而シテ實際各人ノ慣用スル私債募
起法ニ倣フテ以テ其公債ヲ募ル_ト有_ルハ決シ
テ十分ノ成果ヲ收_ル_ル能ハサル可ク且ツ平
常政府ノ慣用スル公債募起法ヲ以テスルニ比
スレハ其困難更ニ幾倍ナルヲ知ル可カラサル
ナリ

第二章 貨幣及_ニ動産信券ノ貯蓄

政府カ貨幣若クハ動産信券或ハ無形動産ト譯スノ貯蓄
ヲ缺_キテ一國ノ大事就中開戦ノ緩急ニ應スル
ト_ク得サル有ル如キハ即チ是レ政府ヲシテ公
債ヲ募起セサル_ト得サ_ラシメル理由ノ其一
ト為ス往時ニ於テ凡ソ将来ヲ豫虞シ且ツ戦闘
ヲ嗜好スル君主ハ常ニ務メテ貯蓄金庫ヲ備設
セリ近代歐羅巴ノ各國ハ大抵此等ノ準備ヲ廢
シテ獨リ普漏士ノミ能ク此方法ヲ維持シ輓近
益之ヲ擴張スルニ至レリ是ヲ以テ余ハ暫ク論

太
政
富

懺ヲ此一場ニ駐メ見今ノ形勢ニ於テ貯蓄ヲ為
スノ利害得失ヲ細カニ説述スルモ決シテ無益
ノ事ニ非サルヲ信ス

昔時ニ在リテハ此貯蓄ノ通シテ各邦國ニ行ハ
レシハ許多ノ例証ヲ按シテ以テ之ヲ徵見スル
トヲ得可シ雅典ノ歴史ニ依レハ「ペルシク」ノ戰
役ヲ經テ「ペロポネーズ」ノ戰役ニ至ルマテ一萬
「タラ」ノ金額ヲ其國庫ニ貯蓄ス又羅暹典ニ於
テモ均ク多少ノ貯蓄ヲ為シタルハ蓋シ疑ヒヲ
容レス彼ノ歷山王ガ「シウズ」及ヒ「エシヤタンス」

ヲ略服セシ時ニ當リテ「シソウズ」人名ノ貯蓄セシ
巨多ノ財貨ハ悉皆歷山王ノ掌裏ニ落チタリ羅
馬ノ初世ニ於テハ共和政府ノ歲入額賣奴解放
ノ二十分ニ稅及ヒ征服ノ國地ニ課收スル各般
ノ稅金ヲ併セテ之ヲ「サチュルニス」地名ノ寺觀ニ貯
蓄シ以テ所謂ル神聖貯蓄庫ナル者ヲ設置ス又
「ポンペー」人名カ伊太利ヲ去ルヤ偶伊太利ノ貯蓄
金ヲ搬移スルニ思ヒ到ラサリシニ由リ其貯蓄
ハ舉ケテ斯撒ノ手中ニ歸セリ後代ニ迄ヒテハ
羅馬ノ「オーギュスト」チベール「ウエスパジアン」ノ諸

太
女
宮

帝及_レ其他ノ賢明ナル帝王ハ皆貯蓄金庫ヲ設
置スルノ慣例ニ沿遵シテリ又「マセドアンヌ」ノ
國王モ均ク貯蓄金庫ヲ設置セリト雖氏「ポール
エニル」_名人ノ收奪スル所ト為レリ我カ佛蘭西ノ
歴史ニ依ルニ上古第一王朝ノ世ニ於テ既ニ貨
幣ノ貯蓄庫ヲ建造シ而シテ其末世ニ至リ衆子
ヲ分封スルト同時ニ舉ケテ之ヲ配與セリ後世
相承ケテ殆ト近代ニ至ルマテ依然此慣例ニ沿
行シ顯理第四世及_レ蘇利ノ貯蓄庫ヲ建造シ又
查理第十三世ノ同盟ナル「マゼッパ」_名人カ一大貯蓄

庫ヲ設置シタリシハ我輩ノ耳熟スル所ナリ降
リテ今世ノ各邦國中ニ於テハ獨リ普漏士ノミ
牢ク此慣例ヲ維持セルヲ見ル蓋シ普漏士ノ君
主カ世々此慣例ヲ墜墮セサルハ便チ其君主ノ
自カラ利スル所アレハナリ勿烈のカ第二世ハ
其即位ノ初時ニ當リ父王ノ貯蓄セシ八百七十
萬「タール」ノ見在金ヲ兼受セリ當時普漏士ノ版
圖ハ總カニ唯々五百萬乃至四百萬ノ人口ヲ有
スルニ過キナリシニ其貯蓄金額ノ此ノ如ク其
レ巨多ナル此例ハ見今佛蘭西政府カ十億萬「フ

太
政
宮

ラシノ貨幣ヲ貯蓄ス可キノ比例ニ髣髴タリ抑
モ勿烈のカ第二世ハ則チ將來ヲ豫虞シ且ツ戰
闘ヲ嗜好セル君主ニシテ其在位ノ長久ナル年
間ニ遭遇セシ幾多ノ變動ニ拘ハラス尚ホ其父
王ニ兼受セル貯蓄ヲ増加スルニ至レリ勿烈的
カ第二世ノ遺存セシ貯蓄ノ金額ハ今日得テ之
ヲ計知ス可カラス何トナレハ則チ當時普漏士
政府ノ會計ハ明カニ其出入ヲ公告スルノ制規
ニ非サリシヲ以テナリ然ルト雖モ獨逸理財論
者ノ記述セル所ニ依レハ六千萬乃至七千萬

トルニ下タラスト云フ是レ當時佛蘭西政府ノ
歳入額ノ半数ヨリ超上スル數額ニシテ而シテ
當時普漏士ノ人口ハ佛蘭西ノ人口三分ノ一ニ
及ハサリシナリ此貯蓄金額タルヤ若シ比例ヲ
以テ之ヲ論スレハ當時ニ在リテ普漏士ノ政略
及ヒ兵勢ニ大緊要ヲ繫ケシムルハ即チ見今仏
蘭西ニ於テ十五億萬乃至二十億萬「フラン」ノ貨
幣ヲ貯蓄スルノ情狀ト大抵相似タル者アリ
普漏士政府ハ何レノ時代ニ於テモ決シテ此貯
蓄ノ制度ヲ弛廢ニ歸セシメタルヲ無シト雖モ

千八百七十年ノ戰役以前ニ貯蓄セシ金額ハ見
ニ勿烈のカ第二世ノ貯蓄セシ金額ヨリ夙カニ
減少セシノミナラス若シ金銀貨幣ノ價位低下
セルト今時各國政府ノ需用增多セルトヲ以テ
之ヲ計較スレハ則チ愈々其減額ヲ見ル可キナリ
今日ニ於テ普漏士政府ハ豈ニ貯蓄制度ヲ弛廢
ニ委スルノ意志アラシヤ愈々益之ヲ擴張セント
欲スル者ノ如シ即チ其實際ノ經畫ヲ視ルニ我
カ佛蘭西政府ノ支付シタル償金五十億萬「フラ
ンク」ノ計内其一億五千萬「フラン」ヲ以テ永續ノ戰

費貯蓄庫ヲ再設シ其六億六千萬「フラン」ヲ以テ
傷殘廢疾者ノ給與貯蓄庫ヲ設置シ其五億萬「フ
ラン」ヲ以テ城砦砲臺及ヒ海港等ノ構築修繕ノ
工作費用ニ充テリ此第二項及ヒ第三項ノ金額
即チ十一億六千萬「フラン」ハ年々漸次ヒ供養ス
可キニ由リ太宰相ノ措置ヲ以テ之ヲ銀行ニ寄
托シ若シクハ内外國ノ動産信券ヲ收買スル「
ヲ得セシメタリ故ニ凡ソ城砦砲臺海港等ノ構
築修繕ニ供充スル工費及ヒ傷殘廢疾者ニ支給
ス可キ年俸ニ必要ナル金額ヲ扣除スルモ必然

ニ五億萬「フラン」ニ超上スル巨額ハ何レノ日時
ヲ論セス伯林政府ニ於テ使用スルヲ得可シ
此資本ノ貯蓄ハ之ヲ二種ニ區別ス其第一種ハ
一億五千萬「フラン」ノ貨幣ヲ貯蓄シ其第二種ハ
外國ニ通用シテ常ニ其市會ニ賣放スルヲ得
可キ三億五千萬「フラン」ノ公債証書及、其他ノ
動産信券ヲ貯蓄ス

余ハ今獨逸帝國ノ公債委員ノ報告書ニ依據シ
テ以テ千八百七十六年即チ和約以後ノ第五年
ニ於テ見ニ獨逸帝國ニ貯蓄セル信券ノ種類ト

其分配方法トヲ舉示センニ即チ一億六千九百
萬「マルク」ノ獨逸錢道証券ヲ以テ傷痍廢疾者ノ
年俸貯蓄ニ供充シ九千四百萬「マルク」ノ獨逸錢
道証券二千三百萬「マルク」ノ「バウエール」ノ百四
半公債証書四百五十萬「ドル」ノ米利堅ノ百五公
債証書二萬「リール」ステルリングノ英吉利不
動公債証書及ヒ十萬「リール」ステルリングノ
魯西亞ノ百五公債証書ヲ以テ海陸防禦ノ工作
費貯蓄ニ供充ス此總額ハ殆ント四億萬「フラン」
ニ達セリ

此貯蓄金額ハ世人ノ推測スル所ヨリ少ナク且
其信券ノ種類ヲ擇ムモ亦均ク世人ノ臆想ス
ル所ニ異ナリ夫レ獨逸政府ノ多ク内國ノ動産
信券ヲ貯蓄シタルハ蓋シ甚々拙策ニ出テタル
者タルヲ免カレス千八百七十三年以來獨逸
ノ信券ハ其何等ノ種類ニ係ルヲ問ハズ皆價格
ヲ低下セルヨリシテ獨逸政府ハ巨多ク損失ヲ
被フルニ至レリ若シ獨逸政府ノ内閣ガ此資金
ノ總額ヲ以テ英國ノ不動公債証書若クハ米國
ノ百五公債証書若クハ我カ佛國ノ公債証書ヲ

買收セシナラハ則チ其貯蓄ノ料理極メテ宜キ
ヲ得可ク又若シ獨逸政府ノ内閣ガ償金ノ大部
分ニ向テ佛國ノ公債証書ヲ領受スルヲ承諾
セシナラハ則チ尚ホ更ニ多額ノ利益ヲ收ムル
ヲ得可キニ惜哉彼レ此ノ計ニ出テ不シテ却
テ為メニ損失ヲ招クニ至レリ是ヲ以テ其當ト
不當ハ之ヲ知ラサルモ獨逸政府ノ運用料理ノ
方法ヲ駁撃シテ是レ適以テ奸黠ナル投機商ニ
浮利ヲ攫取セシムルノ勢援ヲ與ヘタル者ト言
フヲ得サルニ非ス是レ既ニ二三ノ邦國ニ於

テ動産信券ヲ貯蓄セシ結果ノ的例ニシテ實ニ
財計ヲ破リ且ツ道德ニ害スル者ト謂フ可シ蓋
シ此ノ如ク動産信券ヲ收買スルハ損失ノ危険
ヲ冒カレ投機ノ商業ヲ助ケ道德ノ壞敗ヲ來タ
ス禍端ヲ啓キ且ツ政府ニシテ高估ノ市場ニ影
響ヲ及ホスノ甚タレキヲ以テナリ
我カ佛國ニ向テ一大關係ヲ有スル普國政府ニ
シテ戰費貯蓄法ヲ維持スルノ牢固ナル其レ此
ノ如キカ故ニ詳ニ貯蓄方法ノ利害得失ヲ論究
スルハ極メテ緊要ノ事ニ屬ス凡ソ近世ノ理財

家ハ大抵此貯蓄ノ方法ヲ鄙斥シテ唯二三ノ理
財家カ理財ノ點ニ非ス兵備ノ點ニ於テ之ヲ兼
認セル有ルノミ即チ蘇格蘭土ト著名ナル經濟
學家「ユンム」伊太利ノ「ゼ子ウヰジ」及ヒ普漏士ノ
「ケンシリヨン」三氏ノ如キ是レナリ
抑モ此戰費貯蓄ノ一問題ニ関シテハ各論者ノ
其居ル所ノ地位ニ随テ自カラ其解説ニ異同ヲ
生スルヲ免レズ請嘗ニ反對論者ノ說旨ヲ約
言セン夫レ政府ノ本分ヲ以テ之ヲ言ハハ決シ
テ其收入金ヲ集聚シテ以テ之ヲ貯蓄スルノ條

太
女
宮

理無し若シ歳入額内ニ於テ剩餘ノ金額ヲ得ル
有ルヤ乃チ以テ其賦課ス可キ租税ヲ減蠲シ若シ
クハ以テ有益ノ公同工作ヲ舉行セハ則チ随テ
其國ノ富利ヲ殷實ニシ或ハ若シ之ヲ移用シテ
以テ其逋負スル公債ヲ償消シ若クハ以テ公債
証書ヲ買回セハ則チ政府ハ自カラ能ク其聲威
ヲ隆高ニシテ且ツ其運歩ニ自由ヲ得可キハ素
ヨリ論ヲ竝タサルナリ加之ノミナラス政府ノ
貯蓄ハ若干ノ金額ヲ倉庫ニ密藏シテ其社會ニ
運轉スル功用ヲ褫奪シ且ツ國民ヲシテ許多ノ

工業ヲ興起スル所ノ財本ヲ減縮セシムルヲ
免レス且夫レ此ノ如ク容易ニ使用シ得可キ金
額ヲ貯蓄スルヤ常ニ政府ヲシテ無用ノ經費ニ
供充セシメ且ツ立法議院ノ監督ヲ規避セシム
ルノ禍根ヲ為スモノト謂フ可シ豈ニ啻ニ然ク
断言スルヲ得ルノミナランヤ此ノ如ク貨幣
若クハ動産信券ヲ貯蓄スル政府ハ將來ノ事変
ニ豫備スル為メニ常ニ或ニ種ノ損失及ヒ見在
ノ危険ヲ侵ス者タリ之ヲ要スルニ縱令ヒ貯蓄
金庫ヲ設ケサルモ一朝戦役ノ起發スルヲ有リ

テ為メニ金額ヲ必要スルヲ有レハ則チ豈ニ其
公信用ニ依リテ以テ公債ヲ募起スルヲ得可
カラサランヤ
上文ノ論旨ハ大抵事理ノ肯綮ヲ得ル者ナリ夫
レ戦費貯蓄ハ平時ニ於テ常ニ其國ノ繁盛富榮
ヲ妨害スト断言スルモ亦決シテ不可ナルヲ莫
シ蓋シ此貯蓄ノ方法ハ動モスレハ輒チ政府ヲ
シテ濫費浪支ヲ為サシムルノ弊端ヲ啓誘シ且
ツ之レヲシテ武断壓制ノ方略ヲ取ルヲ得セ
シム可キヲ以テナリ且ツ夫レ開明ノ世界ハ常

ニ平和ノ狀況ニ安シ又各邦國ノ人民ハ互相
ニ猜疑ヲ懷カスシテ善ク親愛講和ノ心情ヲ固
クセハ則チ戦費貯蓄ノ良計ニ非サルヤ復々議
議ヲ容レサル可シ
然レ氏戦費ヲ貯蓄スルヤ俄然戦役ノ起費スル
有ル場合ニ當リテハ固ヨリ其使用ヲ資スル無
キニ非ス即チ其貨幣ハ以テ軍器ヲ調ス可ク以
テ兵食ヲ辨ス可ク亦以テ外國ニ於テ須要ノ物
件ヲ購買ス可ク而シテ能ク公債募起ノ為メニ
必要スル多少ノ日月ヲ費消スルノ不便ヲ避ル

太
政
宮

トヲ得可シ夫レ政府ハ銀行ニ戦費ヲ資借シ其
銀行紙幣ノ通用ヲ要强シテ以テ同一ノ成果ヲ
收ムルトヲ得サルニ非ス故ヲ以テ一國ノ政府
ニ貨幣若クハ動産信券ノ貯蓄無キ場合ニ方リ
卒然ニ大戦役ヲ興スト有レハ則チ政府ハ萬モ
己ムヲ得サルノ情勢ヨリシテ銀行紙幣ノ通用
ヲ要强セル如キハ見ニ我輩ノ聞見スル所ナリ
然リト虽氏立憲政体ノ邦國ニ於テハ此要强通
用ノ公告ヲ發スル為メニハ亦必ス多少ノ時日
ヲ費消スル無キト能ハス彼ノ戦費貯蓄ノ如キ

ハ常ニ甚々容易且ツ能ク陰密ニ使用スルトヲ
得可キ者ニシテ何レノ邦國ニ於テモ其憲法ヲ
以テ一朝大危難ニ瀕スル景況ニ遭フト有レハ
君主若クハ宰相ヲシテ之ヲ發支スルヲ得ル
ノ権理ヲ有セシメサルハ莫シ饒使ヒ然ラスシ
テ其發支ハ必ス上下兩議院ノ議決ヲ經ルトヲ
要セシムルモ亦立トコロニ之ヲ辨スルトヲ得
ン然レ氏此結果ヲ公債ノ募起ニ得ント欲スル
ハ決シテ能ハサル所ナリ戦費貯蓄ノ効用ハ其
レ此ノ如シ然ルニ適以テ開戦ノ媒藥ヲ為ス者

ト認断スルハ實ニ兒童ノ見解ニ類スル贅説ト
謂ハサルヲ得ス
戦費ノ貯蓄ハ或ハ貨幣ヲ以テスルヲ得可ク
或ハ動産信券ヲ以テスルヲ得可シ而シテ貨
幣ヲ以テスル貯蓄ハ直ニ之ヲ使用スルヲ
得ルノ使用アリ然レモ或ル論者ハ謂ヤラク是
レ其貨幣ヲシテ全ク平時社會ニ運轉流通スル
功用ヲ失ハシムル者ナリト余カ見ル所ヲ以テ
スレハ論者ノ説ノ如ク常ニ必ス然ルニ非ス見
ニ普國ノ如キハ戦費貯蓄ノ金額ヲ抵當準備ト

為シテ以テ一種ノ兌換証券ヲ発行シ其償還收
入ノ期限ヲ指定スルヲ無ク而シテ國民ヲシテ
何レノ官衙タルヲ問ハス之ヲ公納ニ充用スル
ヲ得セシム此証券ノ発行額ハ殆ト其貨幣貯
蓄額ニ達セリ故ニ若シ此方法ヲ他ノ邦國ニ移
用スレハ則チ能ク貯蓄額ニ均キ証券額ヲ発行
シ以テ其貯蓄金額ノ社會ニ流通スル功用ニ替
代セシムルヲ得可キナリ
若シ夫レ公債証書及ニ其他ノ動産信券ヲ以テ
スル貯蓄ハ別種ノ功用ヲ有シテ年ニ利息ノ收

太
政
官

益ヲ生ス。此利息ハ以テ能ク通常租税ノ賦課額
ヲ輕減シ且ツ政府ノ自在ニ癸支スルヲ得可
キ戦費貯蓄ノ原資額ヲ歳々ニ増加セシム是故
ニ此類ノ貯蓄ハ増殖ノ利益ナキ者ト看過スル
トヲ得サル可シ。政府ハ随意ニ或ハ内國ノ動産
信券ヲ買收シ或ハ外國ノ動産信券ヲ買收スル
トヲ得ルト雖氏内國ノ動産信券ヲ貯蓄スルト
外國ノ動産信券ヲ貯蓄スルトニ随テ其功用自
カラ同シカラス。其内國ノ動産信券ヲ貯蓄スレ
ハ則チ以テ一國ノ理財上ニ便益ヲ與フルヤ鮮

ナカラス。蓋シ内國ノ動産信券ノ價格ヲ騰昂セ
シメテ以テ一國ノ信用ヲ増加シ随テ貸借ノ利
息ヲ低下セシメ且以内國ノ財本ヲ外國ニ流出
セシメサルヲ以テナリ。

其外國動産信券ヲ買收スルハ以テ上項ノ如キ
便益ヲ見ル。丁能ハスト雖氏其貯蓄ノ目的ニ關
シテハ亦頗ル緊要ナル効用ヲ收メ得ル。丁有リ
其故何ソヤ。若シ二國ノ將サニ釁端ヲ啓カント
スルヤ國力ノ微弱ナル一方ニ於テハ其財産ノ
價格ハ必ス大ニ低下ヲ來タシ且ツ其商業ノ經

紀ハ必ス甚々窒碍ヲ致ス。有ルヲ以テ故ニ若シ其國ニシテ將サニ一方ノ強國ト戦端ヲ開カントスルノ形勢ニ逼ル。有ルニ當リ隨即ニ其貯蓄スル内國ノ動産信券ヲ貨幣ニ交換セン。之ヲ欲スルモ極メテ困難ナル可シ且ツ繼令之ヲ交換スル。得ルモ亦必ス巨多ノ損失ヲ受ケサル可カラズ。何トナレハ則チ此ノ如キ場合ニ當リテハ凡ソ内國ノ動産信券ハ國民ノ恟々危懼ヲ懷ケル爲メニ悉ク其價格ヲ減降ス可キヲ以テナリ之ニ反シテ外國動産信券ノ能ク各

國ノ市場ニ其勢力ヲ占ムル者ヲ貯蓄スレハ則チ之ヲ貨幣ニ交換スルハ極メテ容易ニシテ且ツ幾多ノ利益ヲ收ムルヲ得可シ。唯外國動産信券ト雖モ我ト構難兵争スル敵國ノ發行ニ係ル者ハ則チ然ルヲ能ハサルノミ。今夫レ佛普二國ノ間ニ戦端ヲ開ク。有リト假想センニ此場合ニ於テ財計ノ情况ハ果シテ如何ノ結局ヲ現出ス可キカ。普漏士政府ハ先ツ直チニ其奕世兼傳セル戦費貯蓄ノ貨幣ヲ癸支ス可ク然ル後ニ短促ノ期間ニ於テ其貯蓄セル米

利堅ノ公債証書ヲ高價ニ賣却ス可シ何トナレ
ハ則チ米利堅ノ普漏士ト釁隙ヲ啓クノ危疑無
ク随テ他ノ兩國ノ葛藤ヲ結ヘルカ為メニ米利
堅ノ公債証書カ其價格ヲ低下スルノ理由無ク
且ツ米利堅ノ公債証書ハ能ク各國ノ市場ニ向
テ其勢カヲ右メ紐育倫敦亞模下坦維納巴黎ノ
各都府及ヒ其他ノ邦國ノ市場ニ於テ自在ニ之
ヲ賣却スルコトヲ得可キヲ以テナリ然レモ其貯
蓄セル内國動産信券ノ如キ之ヲ高價ニ賣却ス
ルハ甚々難事ニ属ス蓋シ自國ノ方廿ニ戦端ヲ

開ケルカ為メニ其價格ノ己ニ低下スルニ由リ
テナリ又佛蘭西政府ニ於テハ數億萬「フラン」ヲ
銀行ヨリ資借シ以テ其銀行紙幣ノ通用ヲ要强
シ若クハ公債ヲ募起スルニ外ナラス然リ而テ
此兩國カ見ニ負フ所ノ公債ノ多少ハ姑ラク置
キテ之ヲ問ハス今共ニ同額ノ公債ヲ負フコト有
リト假定センニ普漏士ハ見ニ貨幣ト動産信券
トヲ貯蓄シテ其財計ヲ位地遙カニ佛蘭西ノ上
ニ在レハ則チ佛蘭西ハ其戦争ノ勢力既ニ一步
ヲ讓ル者ト謂フ可シ

余ノ上文ニ論述セル所ニ依リテ之ヲ觀ハ凡ソ
外國ノ動産信券ヲ以テスル貯蓄ハ大ニ内國ノ
信券ヲ以テスル貯蓄ニ優レルヲ知會セン然
リト雖氏将来ニ於テ或ハ我ト葛藤ヲ結フヲ無
カル可シ邦國ノ動産信券ヲ擇取セサル可カテ
ザルナリ

嘗テ佛國政府ニ於テ數動産信券ヲ戰費ノ貯蓄
ニ充テンヲ有リ即今年賦償消準備金ヲ以テ高
人會場ニ就キテ公債証書ヲ買回貯存シ而シテ
之ヲ毀銷ニ付セサリシ例証ノ如キ是ナリ其買

回貯存ニ関スル方法ノ詳細ナルハ後篇ニ於テ
説示ス可シ抑モ此ノ如ク年賦償消準備金ヲ以
テ公債証書ヲ買回シ而シテ之ヲ毀銷セサリシ
所ノ目的ハ全ク戰時ニ當リテ政府ノ意度ニ隨
テ自在ニ之ヲ市場ニ發賣シ以テ貨幣ニ交換ス
ルヲ得セシムルニ在リト雖氏若シ此金額ヲ
以テ外國ノ信券ヲ收買シタルニ於テハ則チ必
ズ之ニ優ルノ功用ヲ見ルヲ得タリシナラン
蓋シ戦乱若クハ變動ノ起發スル場合ニ當リ其
影響ヲ受ケサル邦國ノ市場ニ向テ賣却スルヲ

ヲ得ヘキ公債証書ハ則チ最多ノ利益ヲ收メテ
以テ之レヲ貨幣ニ交換スルヲ得ルヲ以テナ
リ
之ヲ要スルニ貨幣ヲ以テシ若クハ内外ノ動産
信券ヲ以テスル戦費貯蓄法ハ概チ經濟學家ノ
常ニ痛ク排斥スル所ナリ蓋シ若シ經濟ノ点ヨ
リ觀察ヲ下セハ則チ戦費貯蓄法ヲ是認スル理
由ノ甚タ少ナクシテ而モ之ヲ非認スル理由ノ
甚タ多キハ復々疑ヲ容レス然レモ一國ノ財計
タル之ヲ經濟學ノ一部ト見スシテ政治學ノ一

部ト見ルニ於テハ則チ何レノ日時ヲ論セス隨
即ニ使用スルヲ得可キ貨幣ノ貯蓄及ヒ隨即
ニ貨幣ニ交換スルヲ得可キ動産信券ノ貯蓄
ハ則チ是レ一國ノ實力ニシテ特ニ公信用ノ薄
弱ナル邦國ニ於テハ尤モ以テ缺ク可カラサル
者トス

然リト雖モ余カ既ニ讀者ニ注意セシメタルカ
如ク此ノ如キ貯蓄金額ヲ準備スルハ其事例甚
々稀少ニシテ今時開明ノ邦國中ニハ獨リ唯々
普漏士ノ一國ニ於テ此の例ノ存スルヲ見ルノ

三千八百七十八年ニ方リ澳地利ニ於テ六千萬
「フローラン」ノ戦費貯蓄ヲ準備ス可キ議題ノ一
時起發セシト有リト雖氏澳國政府ノ負債ハ太
タ重多ニシテ巨額ノ貯蓄ヲ永久ニ維持スルヲ
能ハサルノ情况有ルカ為メニ到底實施ニ至ラ
スレテ寢ミタリ今余ハ本題ニ復シテ之ヲ結論
セシニ戦費貯蓄ノ不存若クハ不足ハ即チ是レ
政府カ公債ヲ募起スル原因ノ其一ナリ

